ふしぎなフーセンガム

ぼくはぼく

2年　R・Oさん

ぼくは「ふしぎなフーセンガム」を食べるとどうなるのかが気になってこの本を読みました。

じゅんは、家でゆびあみをすることが大すきです。でも、ママは男の子と外でサッカーをしてあそんでほしいと思っています。じゅんはサッカーがすきではないのに、どうしてだろうと思っていました。

でも、じゅんもヤマンバミコのことを「女の子なのにらんぼうだ」と思っていました。ぼくはここがふしぎだと思いました。じゅんも「男の子らしく」と言われるのはいやなのに、ミコのことを「女の子なのに」と見ていたからです。

じゅんはふしぎなガムを食べて、女の子になると、ミコといっしょにあそびます。すると、ミコがやさしくて、しっかりものだと気づきました。そして、ミコはお父ちゃんから「女の子らしくしろ」と言われても「わたしはわたし」と思っていたことが分かりました。

ぼくも前に、女の子から「りゅうって名前、へんだね。」と言われて、「女の子なのに、そんなにいじわるなことを言うなんて。」と思ったことがあります。でも、ママに「その子が男の子だったら、いやじゃないの?」と聞かれて、男の子でもやっぱりいやだと思いました。

じゅんもさいごに、男の子だからってサッカーをしなくていいし、ゆびあみがすきなのが自分なんだと気づきます。ぼくも今までは、みんながすきなものはすきになったほうがいいのかなと思っていました。でも、すきなものはみんなと同じでなくていいと思います。みんながおもしろいと思わなくても、ぼくがすきならすきでいていい。自分のすきな気もちを大切にすることが、自分らしくいることなのだと思いました。みんなとちがっていても、ぼくはぼくです。